

種痘導入期の足柄県における天然痘患者の発生状況（1851-1875）

Endemic of smallpox in Ashigara Prefecture during the introductory period of vaccination, 1851-1875

川口 洋（帝塚山大学）

Hiroshi Kawaguchi (Tezukayama University)

本報告では、1850年3月に小田原周辺で種痘が導入されてから、1874年10月に種痘規則が布達されて1875年春に種痘が普及するまでの種痘導入期の足柄県における天然痘流行状況を検討する。すなわち、1875年4・5月に足柄県の各町村で作成された「種痘人取調書上帳」を入力史料とする歴史GISデータベースを構築して、足柄県東部12カ村（足柄上郡中山村・宇津茂村・三廻部村・篠窪村・萱沼村・柳川村・谷ヶ村・関本村、足柄下郡永塚村、淘綾郡中里村、大住郡落幡村、津久井郡下長竹村）の史料内容を分析する。

足柄県東部12カ村では、1851年から1875年に至る25年間に天然痘患者が毎年発生していた。「種痘人取調書上帳」時空間分析プログラムを用いて、12カ村の天然痘患者数を3カ月ごとにGoogle Maps上に時系列アニメーション表示すると、1865年6月～8月、1869年12月～1870年2月、1873年9月～11月、1874年6月～8月の4期間を除き、1852年6月から1875年5月まですべての期間で患者の発生が確認できる。

「種痘人取調書上帳」の所在が確認できる村は、『旧高旧領取調帳』に掲載されている足柄県東部6郡（足柄上郡、足柄下郡、淘綾郡、大住郡、愛甲郡、津久井郡）における全村数の3%にすぎない。天然痘の潜伏期間は7～16日、前駆期が約4日、発疹期は2～3週間とされている。そのため、種痘が導入された1850年以降も、足柄県東部では天然痘患者が恒常的に発生する土着化した状態が続いていたとみられる。

中里村では、1874年11月から1875年3月に至る5カ月間に天然痘を発症した69人（男33人、女36人）のうち49人（男25人、女24人）が、発症以前に初種の接種を受けていた。種痘規則第8条で定められた初種、再種、三種の接種間隔である7年を人伝牛痘苗の天然痘ウィルス感染に対する抵抗力が持続する期間と仮定すると、69人のうち17人（男10人、女7人）が1868年から1875年までに初種を接種されている。一方、1868年から1874年までに初種を接種された73人（男44人、女29人）のうち22%に当たる16人（男9人（5～9歳7人、10～14歳1人、年齢不明1人）、女7人（5～9歳7人））が天然痘を発症した。篠窪村では、1875年3月に天然痘を軽患した男3人と女1人のうち、男2人が1874年に、女1人が1873年に初種の接種を受け、3人とも善感している。一方、1868年から1874年までに初種の接種を受けた45人（男18人、女27人）のうち7%に当たる1歳と3歳の男2人、3歳の女1人が1875年3月に天然痘を軽患した。1874年以前に初種を接種された者のなかには、接種後7年以内に天然痘を発症した者も相当数確認できる。

医務局長・衛生局長として種痘普及を所管した長与専齋は、「モーニッキが傳苗いたしまして以来、既に二十有餘年の間、始終人より人に傳えたる痘苗なるを以て、自然に牛痘の力も薄弱になり、隨て其豫防の効も十分ならず」と善那氏種痘發明百年記念会で演説した。1874年に再帰牛痘苗の生産が開始される以前に接種された人伝牛痘苗の天然痘ウィルスに対する抵抗力は十分ではなかった可能性がある。